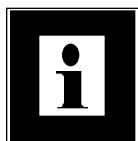


No. 5

1999 - 11 - 25  
日本蜘蛛学会



## インフォメーション

### 会長選挙・評議員選挙 開票結果



先に行われました次期会長および評議員選挙の開票結果を報告いたします。

#### 会長選挙

投票総数 68 票 (うち白票 3 票, 無効 1 票)

有効投票数 64 票

当選 吉田 真 23 票

次点 小野展嗣 10 票

以下省略。

12. 松田まゆみ 15 票

13. 金野 晋 14 票

14. 加藤輝代子 13 票

15. 田中一裕 12 票

以下省略。

会長選挙および評議員選挙管理委員会  
榎元敏也, 牧野達也, 渡部健

#### 評議員選挙

投票総数 618 票 (うち無効 10 票)

有効投票数 608 票

1. 小野展嗣 39 票

2. 谷川明男 35 票

3. 新海 明 35 票

4. 吉田 真 32 票

5. 加村隆英 32 票

6. 新海栄一 29 票

7. 田中穂積 24 票

8. 国見裕久 20 票

9. 榎元敏也 20 票

10. 田中幸一 18 票

11. 青木淳一 16 票

評議員選挙で選ばれた上位 10 名 (会長に選出された吉田 真氏を除く) の中から幹事が選出された場合には, 順次繰上げ当選となります。



## トピックス

日本蜘蛛学会第 31 回大会 (広島県広島市) が開催された

1999 年 8 月 21 日から 22 日にかけて, 広島県広島市にある広島県環境保健協会で日本蜘蛛学会第 31 回大会が開催された。

## 広島大会裏話

加村・金野・吉田の関西在住の幹事3名は、大会前々日の8月19日に広島に乗り込んだ。井原さんを補佐する大会運営助っ人である。会場となる(財)広島県環境保健協会で、早速うち合わせ。井原さんはここで環境アセスの仕事をしているらしく、藍染めの忍者服(?)のような作業服で現れた。立派な髭を生やし、貫禄十分である。ちょっと古い、キン肉マンに出てくるモンゴルマンを彷彿させる(誰も知らんか?)。

今年の大会は環境保健協会の協賛ということで、会場をお借りしただけではなく、「業務」として数人の方のご協力を頂いた。本当に有り難

いことである。まずは会場設営。机・椅子を並べ、ポスター発表のパネルを取り付け、OHPやスライド・プロジェクターを点検する。環境保健協会の方々は

大変有能で、電気関係にも強く、作業は順調に進んだ。「井原さん、パンツ一枚でOHPの台の上でポーズを取ってくれ。ヒバゴンの像ということにしておこう」などと軽口も飛び出す。ところで、比婆山に棲むヒバゴンって、ヒマラヤのイエティ(雪男)の親戚だっけか?

役割分担も決めねばならぬ。大会委員長はもちろん井原さん。懇親会の司会は広島県庄原市の寺西さんをお願いしよう。宴会男の新海明さんを補佐に付けておけば、懇親会はバッチリである。受付は、会場係は...大会の司会に予定していた野嶋さんが来られなくなったというので、私が司会を買って出た。出しゃばりみたいだが、人手不足だからしょうがない。

前日(20日)の午前中に会場設営を終え、あとは井原さんに任せて、我々は評議員会へ。加村さんが庶務報告をやっている最中に、疲れが出たのか、私はついうとうと...すみません。会長と評議員諸氏は会議が終われば飲みにいけるが、幹事はそうもいかない。評議員会の結果を受けて、明日の大会総会の資料を作らねばならぬ。作業が終わったのは午後10時であった。

いつもの年なら私はこの辺で燃え尽きていて、大会は付録である。質問をする気力もなく、スライドが始まって会場が暗くなると、すやすやと寝てしまう。しかし、司会となると寝るわけにもいかぬ。えらいものを引き受けてしまった。

それにしても、今年の大会はすごい。参加者60人はおそらく、東京・大阪以外の開催では新

会場：(財) 広島県環境保健協会

# Hiroshima

August 21-22, 1999

記録である。一般講演(口頭17、ポスター4)も多い。シンポジウム2つも記憶にない。けっこうなことである。これも井原さんの人徳か。井原さんの愛娘・ナミ八ちゃんが

デザインしたかわいらしい弁当券を見ながら、私はそう思った。

今年は真面目に講演を聴いた。「分岐分類によるクモ類の系統推定」「形質の地理的分化と種分化」という2つのシンポジウムを聞いてニューウエーブの台頭を感じ、日本のクモ学も新たな段階に入ったと思ったが、これは私一人が受けた印象ではなからう。

ベテランも頑張っている。徳本さんの「石川県におけるイソコモリグモ過去50年間の生息数推移」はイソコモリグモの激減の実態を生々しく明らかにした、年輪を感じさせる研究であったし、梅林さんの「イソウロウグモ属のクモの後疣出糸管の形態」は定年後に氏が自宅に設

置した電子顕微鏡による観察の成果を披瀝したものであった。正に熟年パワーである。

当然ながら、懇親会も盛り上がった。ラ・ルーナというおしゃれな店は入口が分からずみんなまごまごしたが、料理もワインもすべておいしかった。しかしこの辺になると私の頭はもうろうとして、最初は関口先生の横に座っていたはずなのに、気がつくと松田まゆみ・工藤泰恵・船曳和代・榊元智子の元娘四人組のテーブルに押し掛け、何かわめいていたことしか記憶がない。司会の寺西さん・新海さん、ごめんなさい。

というわけで、今年の大会は大成功であった。井原さん・寺西さん、ご苦労様でした。大会案内の作成・発送など、大会準備に関わった加村さん・金野さんおよび関西メンバーの方々、有り難うございました。最後に、大会を協賛された(財)広島県環境保健協会の方々に厚く御礼申し上げます。

(吉田 真)



## 同好会情報

日本には日本蜘蛛学会だけでなく、各地に同好会がある。ここでは、そこで行なわれる採集会や講演会、そこで発行される定期行物などの活動内容を紹介する。興味を持たれた方はぜひ入会して、行事などに参加されてはいかがだろうか。

和歌山クモの会(会長:米田 宏)

会報「和歌山クモの会会報」を年1回発行。  
総会・観察会を年1回開催。

和歌山クモの会会報 No.9(1999.6.30 発

行)

米田 宏:クモに関する迷信や伝説(6)

新海 明:大内山の「牛乳うどん」とカネコト  
タテグモ

東條 清:海南省孟子ピオトープのクモ

稲垣成二:雲取温泉でクモを採る

稲田武彦:身近な人達の蜘蛛を見る目

稲垣成二:ヤマシログモについて

入会申し込み

642-0002 海南省日方 1156

東條 清 (事務局)

会 費:年 500 円

東京蜘蛛談話会(会長:萱嶋 泉)

会報「KISHIDAIA」を年2回、「談話会通信」  
を年3回発行。採集会年4回・合宿年1回・総  
会例会などを年2回実施。

今年度の採集会は、2000年2月20日(日)  
山梨県大月市扇山周辺

集合:午前11時 JR中央本線鳥沢駅改札口

合同例会は1999年12月5日(日)。国分寺  
市商工会館 午前10時より。

KISHIDAIA 77号(1999.8.31 発行)発刊  
30周年記念号

萱嶋 泉:湯原清次先生に教えて頂いたこと  
須賀瑛文:KISHIDAIA 発刊30周年をお祝いし  
て

太田定浩:『KISHIDAIA』発行30周年をお祝い  
する

貝發憲治:「KISHIDAIA」発刊30周年に寄せて

吉田 真:KISHIDAIA には負けへんで!

東條 清:和歌山クモの会からのお祝いの言葉

米田 宏：祝辞 並びに「家蜘蛛」になったク  
ロガケジグモについて  
佐藤幸子：クモを学んで 30 年  
山川 守：談話会の思い出  
貞元己良：クモとの付き合い、「初めて」という  
言葉の思い出  
加藤輝代子：パラグアイから発刊 30 周年を記  
念して  
梅林 力：東京蜘蛛談話会 あれこれ思い出話  
笹岡文雄：私は東京蜘蛛談話会！  
木村知之：入会 10 周年に思うこと  
平松毅久：キシダイア 30 周年談話会歴 10 年  
嶋田順一：「談話室・滝沢」  
池田博明：一本の電話  
新海 明：夢  
谷川明男：キシダイアよ永遠なれ  
安田明雄：KISHIDAIA 発刊 30 周年に寄せて  
平松毅久：網に落下した花をラッピングして食  
べたオオシロカネグモ  
小管恭平・高橋 聡・安田明雄：円海山におけ  
るイソウロウグモと円網種のクモとの関係  
永井 均・新海 明：カネコトタテグモの扉づ  
くり  
梅林 力：1998 年秩父合宿後日談 オニグモ  
と寄生バエ  
南部敏明：カトウツケオグモ *Phrynarachne*  
*katoi* Tikuni (カニグモ科) の飼育  
秋元維那・秋元 昇：カバキコマチグモの巣の  
研究～夏休み自由研究の記録から～  
徳本 洋：石川県金沢市近辺各山地におけるジ  
ョロウグモの垂直分布  
谷川明男：西表島のクモ類採集記録 V  
DRAGLINES  
畑守有紀・金野 晋：ヤリグモ V S オナガグ  
モ・パート 2  
成田和子：ワスレナグモの仔は天をめざす

新海 明：「あっちこっちのクモ」= 目録  
DRAGLINES の創設について  
新海 明：ゲホウグモの円網の記録  
初芝伸吾：年越しするジョロウグモ  
新海 明：日盛りの中のクモ (オオシロカネ  
グモの体温調節)  
初芝 涼：国立市の湧水にヨリメグモ  
平松毅久：クモの網にかかった有翅アブラム  
シ  
初芝 涼：コケヒメグモの卵嚢保持  
大類正久：伊豆のザトウムシ回想録  
榊元智子・榊元敏也：滋賀県南部のクモ類採集  
記録 1  
貞元己良・工藤泰恵・和仁道大・長井芳夫：東  
京蜘蛛談話会 1997 年度観察採集報告  
船橋県民の森のクモ  
新海 明・千田高史・宮下 直：東京蜘蛛談話  
会 1998 年度合宿報告  
埼玉県秩父地方 (大滝村・秩父市) のクモ  
田中穂積：コモリグモ科標本のデータの追加 (リ  
スト)  
入会申し込み  
350-0816 川越市上戸 91-3 瀬尾荘 202  
平松毅久 (事務局)  
Tel 0492-33-8792  
会 費 年 2800 円  
(2000 年度から 3800 円, 学生は 2000 円)  
関西クモ研究会 (会長: 山野忠清)  
会報「くものいと」を年 2 ~ 3 回発行. 採集  
会・研究会例会などを年数回実施.  
例会は, 1999 年 12 月 12 日 (日) に大阪市

の四天王寺高校で実施。

くものいと 26号(1999.7.13発行)

山本一幸：但馬地方の真正クモ類

清水裕行：トリノフンダマシとカトウツケオグモ

船曳和代：姫路科学館で「クモ展」開催

須賀瑛文：クモ展見学ドライブ紀行

緒方清人：素晴らしきクモ展

八幡明彦：クモ展を訪れた仲間たち

吉田 真：ヒトエグモについての覚え書き



#### 入会申し込み

567-8502 茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学生物学研究室内

関西クモ研究会

Tel 0726-41-9555 (西川研)

0726-41-9550 (加村研)

Fax 0726-43-9432

会費 年 1000 円

中部蜘蛛懇談会(代表：村上 勝)

会報「蜘蛛」を年 1 回、「まどい」を年 3 回発行。採集会・例会を年数回実施。

総会・研究会は、2000 年 2 月 11 日(金)に予定。

蜘蛛(KUMO)31号(1999.2.11発行)

内容は、遊絲4号を参照のこと

#### 入会申し込み

444-0076 岡崎市井田町字荒居 47-6

板倉泰弘 (事務局)

Tel 0564-28-5857

#### 会費

正会員 年 2500 円(高校生以下、1000 円)

準会員 「まどい」のみ 500 円

三重クモ談話会(本部：太田定浩)

会報「しのびぐも」を年 1 回発行。採集会・合宿・例会などを年数回実施。

今年度の採集観察会は、1999 年 12 月 5 日(日)久居市雲出川流域で実施。

近鉄久居駅西口前 午前 9 時 40 分集合。

大雨以外は決行。参加希望者は事務局まで連絡のこと。

総会兼学習会、懇親会は、2000 年 2 月 26 日(土)~27 日(日)に予定。

しのびぐも 26号(1998.12.31発行)

内容は、遊絲4号を参照のこと。

#### 入会申し込み

515-0044 三重県松阪市久保町 1843-157

貝發憲治 (事務局)

会費 年 1500 円

### 関西クモゼミ

毎月1回,第3か第4の日曜日に滋賀県草津市の立命館大学で開催.

会費などなく誰でも参加できる.

連絡先 立命館大学理工学部生物地球科学研  
吉田 真 077-561-2660

### 東京クモゼミ

毎月1回,第1日曜日に東京大学農学部の宮下研または神奈川県立七里ガ浜高校で開催

会費などなく誰でも参加できる.

東京クモゼミ報告(プリント)を配布.

連絡先 新海 明 0425-22-2605  
(新海 明)

## 言いたい! 聞きたい!



### 集団生活をする南米のクモ

浜村徹三

こんな生態のクモがいるのかとびっくりさせられ,世界は広いと感じる体験をしてきました. JICAの技術協力の関係の短期専門家として,昨秋(1998年10月)に南米パラグアイへ1ヶ月間行ってきました. 滞りも終わりに近くなったある日,皆さんもご存知の加藤輝代子さん(ご主人がJICAの長期専門家で,パラグアイ在住ですが,すっかり忘れていたというか,もう日本に戻っていると思っていたのですが),から電話があり,問題の集団生活をするクモを見るため案内してもらいました. 彼女は長期に渡って,観察,研究を続けているようでしたので,その

うち成果をまとめて出してくれると思いますが,私は30分ほどの観察による「ビックリしたな-もう」の部分だけ書くことにします. これらのクモは体長2cmくらいでほぼ黒色,日本のクモではイエオニグモに似た感じで,見た時はどのクモも亜成体くらいで,ステージは揃っているようでした. 日中は地上4mほどの樹上になりの数のクモが一ヶ所に集まって,ソフトボールくらいの黒い塊になって,じっとしています. このクモのボールはルーズではなく,しっかりした塊のように見えました. 加藤家の運転手は探すのが慣れているようで,車を運転しながら,あそこにいる,ここにもいると場所を教えてくださいますが,慣れない私にはほとんど見えませんでした. 私が案内してもらった時間は4時頃で,暗くなるには少し早かったのですが,曇っていたためか分散を始めた集団が見つかり,全体の網が出来上がるまでの30分くらいを観察することができました. クモの集団からは一本の丈夫な横糸が張られています. この糸は毎日クモが通るので太く丈夫になっています. 夕方になるとクモの団子がゆるんで,横糸を伝ってゾロゾロとクモが移動し,適当な場所を選んで下に降り,一匹のクモが30cmくらいの円網を一つ作ります. その円網は4~5段作られるので,あっちでもこっちでもそこらじゅうでせっせとクモが網を作ります. 最後は全長10mくらいの網の中にすき間無くびっしりと円網が張られました. 横から見ると劇場の舞台の鍛帳(どんちょう)のような見事なものでした. 以前に加藤さんの話を伺った時は,ふるしきくらいの網に何匹かのクモが付いている図を想像しましたが,聞くと見るでは大違いでした. 私が見た一つの集団は約200個体で,これが垂直な一面に網を張って個々の網の中央にクモが居並ぶ様は壮観でした. この網は植物とか建物の前に張

るのではなく、完全に風が吹き抜ける空間に張っていました。風が吹くとクモの重さもあって、カーテンがゆれるように幅 10m の網がゆれていました。夜が明けると網をたたんでまた、一塊のクモ集団に戻り、日中はジッとしている生活をくり返している訳です。見たままを書いたつもりですが、その異様さが表現できたかどうか、あまり自信がありません。もう一度言い直しますと 200 匹ものクモが一つの塊になって日中を過ごす生態も異様なら、夜間は一枚の網を共同で張って餌を取る生態もユニークではありませんか。多くの種類で、卵のうから出た子グモがまどいをしますが、このクモは成体になるまでまどいと分散を続けていると言えます。生殖、産卵、最初の集団の形成など、どうなっているんだろうと興味は尽きませんが、そのうち加藤さんの報告があるでしょうから、楽しみにしたいと思います。貴重な体験に案内していただいた加藤さんに感謝します。

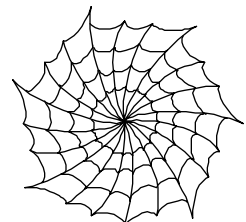
## 姫路で行われたクモ展印象記

須賀瑛文

平成 11 年 6 月 26 日から 7 月 18 日まで姫路科学館において、身近な動物・小さな芸術家というサブタイトルでクモ展が催された。筆者は、6 月 27 日にこのクモ展を見学した。その印象を簡単に記す。

会場に入って驚いたのは、想像していたよりも会場が広いこと、展示物の数と種類の豊富なこと、そして見学者がとても多いことである。えてしてこの種の展示会場は、閑古鳥が鳴くようなことが多いのに、この会場は活気にあふれているのである。見学者の中に親子連れが多いのもうれしい。「これがコガネグモよ! ちゃ

ん」「これ、うちにいるクモ、アシダカグモだね、お母さん」「ママ、見て見て、このクモの巣きれいなね」「パパ、あそこ、テレビ!クモ合戦」。そんな会話があちこちで聞こえてくる。名古屋や岐阜でやったら、これだけ多くの、それも楽しそうな見学者を集めることができるだろうか。今回の展覧会は、船曳和代さんの「網の標本」の展示が中心と聞いていた。ところが、なんのなんの「クモの生物学と民俗学入門」といった感じである。その上、クモの食わず嫌いの人でも楽しむことができるように、よく考えた構成がなされている。先ず第一弾、入り口には船曳さんの妹さんの作だという、とても可愛らしいコガネグモのぬいぐるみ(商品になるほどの良い出来栄え)が入場者を出迎えてくれる。さらに第二弾、入り口を入るとすぐ、船曳さんのアイデアの「クモクイズ」コーナーがあり、子供たちの興味関心を一段と盛り上げる工夫がされている。抽選の結果当たると、船曳さん特製の美しい網の標本が貰えるという。はじめに船曳さんの網から見学する。相変わらず素晴らしい出来である。今回は、「網の標本に、生態写真(緒方清人氏撮影)と液浸標本が添えられ、三点セットで展示がなされていて、クモの初心者でもよくわかる工夫がなされていた。シロオビトリノフンダマシなど夜造網するクモの網には苦労されたとか。また、ハツリグモの網に木の葉を加えたもの、また、ジグモの巣などは船曳さんによれば新しい試みだという。船曳作品以外の展示品も多い。小澤實樹氏のアートは四日市市で行われた学会の大会の際見たことがあるが、何回見ても素晴らしい。やはり専門家の作品である。クモだけをテーマにこれだけ



の作品を描ける芸術家は小澤氏のほかにはいないだろう。落語家の桂あやめさんのクモグッズも面白かった。展示ケースの中には、高価な着物、帯などのほか肌着（下半身用のものもあった）まで、すべてクモやクモの網がデザインされている。こんなものまで!?。クモグッズ収集者の一人として大変参考になった。蛇足ではあるが、筆者のグッズも、出展を依頼された帽子など数点が並べられていた。齋藤慎一郎さんは、お得意の民俗関係、そしてクモ合戦ビデオなどを提供され、ビデオはビデオコーナーで放映されていた。このコーナーには結構親子連れが大勢集まって楽しんでた。文学面からも、クモを詠んだ和歌・俳句がたくさん集められて展示されていた。仮死の蜘蛛こらへ切れずに歩きだす（右城暮石）、古壁の隅に動かずはらみ蜘蛛（正岡子規）などはクモの生態をよく表していて面白かった。見終わって、この展覧会を、このままこの会場だけで終わってしまうのは惜しい気がした。展示物持ち回りで、他の都市で開催することができれば理想的だが・・・実現できれば少しは世のクモ嫌いを減らす一助にはなるだろう。ところで、今回の展示に際しては、文中に記した人々のほか、榎元智子氏、清水裕行氏を含めた関西クモ研究会のメンバーの協力を得たという。その上、会場に並びきれないほどの展示物が集まって、うれしい悲鳴をあげたという。これは、中心となった船曳さんのお人柄のしからしめる所以であろう。こんなことを考えながら、お土産の「クモ展示解説」（この中には、清水裕行氏の姫路市産のクモ目録のほか盛り沢山の内容が48ページに印刷されている）を手にして会場をあとにした。最後に、この素晴らしい「クモ展」を企画された船曳さんと姫路科学館の方々に敬意を表します。

付記：本文は、本誌編集者の依頼により、関西クモ

研究会「くものい」とNo.26に投稿した「クモ展見学ドライブ紀行」の一部を書き改めたものである。すでにお読みの方はお許しいただきたい。

## 珍品，ヒシガタヒメグモを 採ったけれど・・・

榎元ともこ

9月19日に行われた関西クモ研究会の採集会で、珍しいクモ「ヒシガタヒメグモ」を採集しました。採集場所は姫路市青山の自然観察の森です。この日は船曳さんの案内で、午前11時から姫路科学館の裏山で採集が始まりました。開始直後は元気いっぱい、ハツリグモなどを採集していたのですが、お昼ご飯を食べると、早くも私の頭と体はお休みモードに入っていました。だいたい集中力の続かない方なのですが、暑さとお目当てのトリフンが採れないという条件が加わり、気分がダレダレになってしまったのです。

あとはまあ、採れなきゃ採れないでいいわという気持ちで、午後のフィールド、自然観察の森に出かけました。ジョロウグモばかり目について、やる気がないのでなかなかクモが見つかりません。ポーっとしながら歩いていると、突然、頭の中に声が聞こえてきたのです。「クモを探すには、まず糸を探すのです。」こ、これは新海栄一さんの声!!「そうだ、糸を探せばいいんだ。」急に目が覚めた私は、糸を探し始めました。すると、ヒサカキの木に下の方に（地面から50cmぐらい）、なにやら怪しげな網があるではありませんか。糸をたどっていくと、葉の陰に白っぽい三角のお腹をしたクモがいます。「あっ、オダカグモや」と思い、逃がさないように慎重にアルコールビンに入れました。ビン



の中のクモを見ると、なんだかちょっとオダカグモとは違います。加村さんも、西川先生も調べてみないと分からないとおっしゃいます。「もしかしたら、うふふ、新種かも」とほくそえむ私に、「お腹の空いたオダカグモとちゃうか」という説(?)を出す人もいました(そんな訳ないやろ)。

と、いうわけで、家に帰って調べてみると、それはヒシガタヒメグモと分かりました。千国さんの図鑑にも珍しいクモと書いてあります。榊元(敏)がメールで谷川さんにどれくらい珍しいクモかきいたところ、たいへん珍しいクモであるという答えが返ってきました。やった! やった! すぐに加村さんからあのクモは、ヒシガタヒメグモという珍しいクモなので船曳さんに連絡してくださいというメールが来て、いよいよ珍品ゲットの実感がヒシヒシわいてきました。やった! やった! クモ採集って面白い!!



有頂天になって、さっそく船曳さんに電話をすると「ああ、ヒシガタヒメグモなあ、私も3日前に採ったわ」と、ちょっと気の毒そうにいわれてしまいました。ガクッ!! 私の喜びは半減してしまいましたが、ヒシガタヒメグモのおかげで、私でも珍しいクモが採れるという小さな自信ができました。新海栄一さんの教を胸に「また珍しいクモを探さず」と闘志を燃やしています。

今回の採集会に天才クモ少年(幼児)、5歳の池田勇介君が初参加してくれました。彼はいつかみなさんにも会わせたい逸材です。

## フタモンアシナガバチの餌となったキザハシオニグモ

徳本 洋

わが国各地でごく普通に見られるアシナガバチであるフタモンアシナガバチ *Polistes chinensis* がキザハシオニグモ *Araneus abscissus* 幼体をもっぱら狩っていたという例がこのほどわが国で見つかり報告された。ジガバチ類のある種のようにクモを専門に狩り、それを幼虫の餌として利用する狩りバチが存在することについては、国内外を問わず、これまでに数多くの報告があって、クモ関係者にもよく知られているが、アシナガバチがクモを狩ったという例はこれまでクモ研究者にはほとんど知られていないように思う。しかも、今回のフタモンアシナガバチのクモ狩りは幼虫の餌としてではなく、雌バチ自身の餌としてではあるが、この餌の用途にはこれまで一般人には知られていない内容を含んでいるので、この紙上を借りてクモ関係者にその報文を紹介し、若干の補足説明を加えてみたい。

### 事のいきさつ

今回その報文(Kudo 1999)を書かれたのは工藤起来博士(金沢大学理学部生態学研究室、現・茨城大学理学部自然史研究室)である。昨年、かねてからアシナガバチの生態を研究しておられる同博士から私にこのクモは何か、という問い合わせがあった。標本を拝見したところ、小さな幼クモで、私の手に負える代物でなかつ

た。しかしどうもオニグモ属 *Araneus* の一種のように思われた。クモがいた場所は茨城県潮来(いたこ)の草地で、1996年4月21日、23日に同博士がそこでフタモンアシナガバチの調査をしておられたところ、その草の間にこのクモがかなりの数、網を張っており、マークしていたフタモンアシナガバチはもっぱらこのクモを狩っていて、ほかの餌は狩っていなかったという。

私はこのクモの同定引き受けの可否を、このあたりの土地に詳しくなことを想定して新海栄一氏にお尋ねした。幸い、同氏はこの場所を知っておられ承諾を得た。また一方で工藤博士とは何回もファックスやメールをやりとりして、その場所の環境、網の形態などを詳しくお尋ねした。結果として分かったことは、背のまだあまり高くない草がそれほど混まらずに生えており、クモの網は垂直でも斜めでもなく水平に張られた円網であったということであった。クモの形態に加えて、この環境と水平円網ということが決め手となって、このクモはキザハシオニグモの幼体と考えてよいということになった。日本産オニグモ類で、水平円網を張るのはこのクモだけであり、しかもこのクモはこういう環境によくいるということであった。

#### アシナガバチはこのクモを何に使ったか

アシナガバチは雌単独で越冬し、春になると独力で新しい巣をつくる。そして六角形の育室の中に産卵し、新しい家族を増やし始める。それでこの越冬した雌のことを最近のハチ研究者は「創設メス foundress」と呼んでいるそうである。従って原著表題中の pre-founding foundress は「巣作り直前の創設メス」という意味になる。

ところでこの創設メスの栄養問題についてで

あるが、アシナガバチの生態研究者の間には、この創設メスが初期巣をつくり、産卵するためにはエネルギー源が必要であることはもちろんとして、さらになんかの量のたんぱく質を餌として摂取する必要があるに違いないという考えがあった。しかし越冬からさめたばかりの春早い時期に、実際にハチがどんな餌を摂食しているかの報告例はこれまで世界的にもなかったらしい。

ところでアシナガバチは英語圏では paper wasp と呼ばれている。そしてその名のように木材から繊維を大顎で削り取って口内分泌物でなじませたものを、うすく引き伸ばして巣をつくってゆく。さらにハチは頻りに口内分泌物を巣の表面に上塗りして、巣の風化や雨による破壊を防ぐという作業もおこなっている。だから巣を化学的に分析すると、積み上げたコンクリートブロックの間隙のような雨のかからない場所につくられた巣よりも、木の枝のような雨にさらされる場所につくられた巣の方が、はるかに多くの口内分泌物を含んでいることがすでに分かっている。そしてこの口内分泌物の成分にたんぱく質が大きくかかっているのである。また今回の報告とは別に、同博士はハチが摂取した餌たんぱく質全量のうちのどれくらいがこの口内分泌物の生産に使われているかということも解明しておられる。

それはとにかくとして、今回の報文で明らかになったのは、この調査がおこなわれた時の潮来の観察地点ではフタモンアシナガバチ越冬メスが初期巣建設や卵生産のために多くを必要とするたんぱく質の源をキザハシオニグモ幼体に求めていたという事実である。



## フタモンアシナガバチのクモ狩りは 一般的な行動か

そこでわれわれクモに関心をもつ者が次に考えることといえば、はたしてこのようなクモ狩りはフタモンアシナガバチにとって一般的なことなのであるのか、ということであろう。

今回の報文はハチの餌探索行動について詳しく記されているが、クモが餌対象として一般的であるかどうかについては深く触れていない。ただ、今回の発見はあくまでも一地点での観察事実であり、今後他の多くの地点での創設メスの採餌行動観察が必要であると記しておられる。しかしフタモンアシナガバチは初期巣建設時の餌として必ずクモを使うとは限らないのではないかとことは十分考えられる。だからこの観察場所ではその時期にほかの適当な餌昆虫がいなかったか、または少なく、たまたまかなり多くいたキザハシオニグモ幼体が餌として利用されたのかもしれないという（工藤私信）。

アシナガバチ類は一般に鱗翅目昆虫すなわちチョウ・ガの類の幼虫を狩るハチとして知られているが、春になって間もない時期であり、この草地にはまだそれらの昆虫の幼虫が育っていなかった可能性はあろう。事実、工藤博士自身もかなり他の餌になりそうな動物がいなか探したが見つからなかったと報文に記されている。また、5月以降になれば、創設メスであっても鱗翅目昆虫の幼虫などを多く狩ることはすでに知られている。これらの餌が豊富になってくるからであろう。ただ4月以前にはまだこれらの餌昆虫の幼虫がきわめて乏しく、その時期の貴重な餌が今回のクモ幼体であったということである。このあたりの詳しい観察データの積み重ねは今後ハチ研究者が進めてゆかれるだろうが、クモに関心をもつわれわれとしても今回明らか

になった事実を頭において野外観察の目を一つ肥やしておき、機会があればクモ、ハチ両研究者の側からの解明ということがあっても楽しいのでなかろうか。

またわれわれクモ屋は、春早くから出現しているいろいろなクモの幼体が結構、野山で多く見られることを経験している。これらを巡る複雑な食物連鎖の網が、春の息吹のかけでひそかに作られていても何の不思議もない。草原のキザハシオニグモのように、林縁のなにかの子グモがアシナガバチの餌になっているのかも？などといふ私は思ってしまう。

なお、もっと遅い時季になればフタモンアシナガバチに働きバチが生まれてきて、盛んに餌を探索するが、その際、率は小さいがクモがその餌対象に含まれることは報告されている（Suzuki 1978）。しかしそのクモの種名は記されていない。

## キザハシオニグモについて

また、これを機会として、キザハシオニグモの生活史や生態についての既知情報を調べてみたが、情報量の比較的多い種を揃えているオニグモ類の中では、驚くほど記録が少ない種であ



キザハシオニグモ  
(写真：谷川明男)

ることが分かった。

このクモは春にもっとも早く成体が出現するオニグモとして知られているが、それ以外の情報はほとんどない。ちなみに池田博明氏の労作「クモ生理生態事典」(1987)を開いてみても、このクモの項には数行の記述があるだけである。同氏のホームページに載せて流されている同書の最新版を見ても、このクモの項にはその後の追加内容が認められない。本学会は熱心なアマチュア研究者会員を多数持っているのが大きな特長だろうが、そうした会員による解明を待っている分野は膨大にあるだろう。そしてこのクモの自然誌的情報をより充実させることもその一つであることは、このように明らかである。

本稿に私はアシナガバチという私自身があまりよく知らない昆虫のことを書いた。文内容に誤りがあれば私の責任であることを記すとともに、文末ながら、貴重なご教示や参考文献の配慮をいただいた工藤起来博士に厚くお礼申し上げます。

#### 文 献

- 池田博明, 1988. クモ生理生態事典 . pp.1-173. 自刊.
- Kudo, K. 1999. Immature spiders of *Araneus abscissus*, as a prey for the pre-founding foundresses of the paper wasp, *Polistes chinensis* (Hymenoptera: Vespidae). *Entomological Science*, 32(2): 195-196.
- Suzuki, T., 1978. Area, efficiency and time of foraging in *Polistes chinensis antennalis* Perez (Hymenoptera, Vespidae). *Jap. J. Ecol.*, **28**:179-189.

#### 西表クモ談話会奇行 ( 3 )

平松毅久

西表4日目は終戦記念日である。大分暑さには慣れたが出発前にひいた風邪が進行し咳がひどくなってきた。しかし食欲はあるし体の不調は感じない。病は気からというやつか。

この日午前中の目的地は島の北北東、海岸線沿いの高那地区にある洞窟である。洞窟へ続く海岸へは林の中を歩いて下りようになっており、薄暗い林内にはそこら中の木の葉裏にヒメユウレイグモがいた。このクモは垂糸に多くの粘球がついているヒメグモ科のような網を作る。谷川氏が東京蜘蛛談話会の例会でこのクモを紹介して以来、新海氏はこのクモの造網過程に興味を持ち西表滞在中にその謎を明らかにするのが目的であった。ひとしきり網の撮影が済み、新海氏が網の観察に没頭し始めたため、筆者は谷川氏の案内で海岸に下りて少し歩いた所にある、開口部が海に面した高那洞と地元の人が呼ぶ鍾乳洞へ向かった。筆者の目当てはカラカラグモ科の一種で、谷川氏からこのクモの存在を知らされた。全身が黒っぽく、本州では普通種のカラカラグモよりサイズが大きく(約1.5倍)、中心部から出た trapline と呼ばれる1本の糸で円網を円錐状にたわませるのはカラカラグモと同じだが、こしきがアシナガグモの仲間同様丸くあいているところがユニークなことであった。洞窟の入り口から少し中へ入った所で幼体を見付け、さらに奥へ行くと鍾乳石の間や天井部に成体、幼体各ステージが網を張っており、天井部からは零型の卵のうが長い糸(5cm前後)でぶら下がっていた。やはり噂通りの網である。trapline は中心から斜め上に出ており、クモはほぼ垂直上向きにちょうど国旗掲揚のような格好で占座する。脅かすとクモは trapline を伝って上に逃げる。網の大きさなどを測定し



祖内岳からの眺め

て洞窟を後にした。

昼は島の北北西にある祖納へ移動、祖納岳(363m)の頂上を目指した。林内のオ・プンスペ・スには谷川氏が最近記載したばかりのサキエダオニグモが直径20~30cmの目の細かい網を張っていた。全身が黒い光沢のある丸くて可愛いクモである。リタ・を素早く動くヒアシハウシグモは黒褐色の体に名の通りオレンジの脚が美しい。樹洞や崖にある一見ヤチグモ風の網はヤエヤマジョウゴグモの網だそうだ。頂上の展望台から見た浦内川のマングロ・ブ林の緑と青い空の眺めはすべての事や時の流れを忘れさせてくれた。

その夜は再び『姫幽霊』を見に高那へ。星空への祈りも空しく、気難しい姫は一向に妖しの糸を紡がなかった。葉裏に姿形は普通のヤリグモながら卵のうが白いコンペイトウ状(ヤリグモは褐色の紡錘形)のクモがいた。出のうした子グモが24頭親と一緒にあった。

翌16日も高那である。筆者は幸運にもカラカラグモ科の一種の造網過程を見ることができた。詳細は別の機会に譲るが、ヨコ糸製作までは普通の円網種と同じだが、その後タテ糸を1本ずつ緩めこしきを噛み破ることがわかった。昼は西部の古見へ移動、林内の小さな沢の近くでチビすけ3兄弟、カラカラ sp.(1mm前後で、

腹背はオレンジの地に黒点2つで美しい)、ヨリメ、ユアギ sp. と対面。夜は前日に続き午前中も駄目だった『姫幽霊の機織り』を拝みに4回目の高那詣である。まるで憑かれたように車で夜道を急ぐ男たち……。新海氏西表最後の夜に果たして願いは叶えられるのだろうか？  
(つづく)

## European Colloquium of Arachnology 参加記(1)

宮崎勝巳

さる7月12から17日にかけて、スロバキア東部のスタラ・レスナ(Stara Lesna)という所で"18th European Colloquium of Arachnology"が開かれました。私は後述するいきさつから、この大会に参加する機会を得たのですが、日本人唯一の参加者ということもあり、大会の様子等について「遊絲」誌上をかりてご紹介しようと思い立ちました。とりとめもない記事になるかと思いますが、しばしお付き合いいただくと幸いです。

- 大会当日までのこと -

私は昨年(1998年)の10月より、一年間の予定でポーランドのクラクフ(Krakow)にあるヤゲロニアン大学(Uniwersytet Jagiellonski)動物学研究科に、日本学術振興会の特定国派遣研究者として滞在しています(ちなみにこの10月には帰国しているはず)。せっかくなので、この滞在中に一つくらいヨーロッパで開かれる国際学会で発表でもしてみようと、渡航前にインターネットで種々検索してみたところ、引っ掛かってきたのがこの大会でした。参加にあたっては、もちろん自分の

研究内容と合致することが必要条件なのですが、クラクフとスタラ・レスナは直線距離にして約100kmと非常に近いという事と、大会の日程表を見てみると、同伴者のためのプログラムが充実しており、家族と一緒に大丈夫そうだ（ちなみに妻と当時3才・1才の娘二人）という、多少不純な動機もあって、参加を決めました。

さて何はともあれ、まずは参加申し込みをしなければ始まりません。この大会にはインターネットのホームページがあり、そこにあるフォームから直接申し込みできる形になっていて、これは非常に便利だと感じました。ところがいざ使ってみると、"Script Error"なる表示が出てうまく送信されません。そこで大会のsecretary宛に電子メールで問い合わせてみましたが、今度はそれが"return mail"として戻ってきてしまいます。締め切り日が迫っていたこともあってちょっと焦りましたが、結局締切日にファックスを送ることで何とか滑り込みました（送信フォームに不具合があり、そのため締切日が延長されていたことが、後になってわかりました）。

次に、大会参加費の支払い（銀行振込）をしにクラクフのとある銀行に行ったのですが、窓口でポーランドの銀行に口座がないと送金できないといわれ、今度は大いに焦りました。日本人がポーランドで銀行口座を開くには、入国の際に外貨持ち込みの申告書を提出しておかなくてはいけないのですが、私の場合、ポーランドで口座を開く必要も、それによるメリットもなかったのです。申告書を提出せずに入国していたのです。入国後の申告はまず不可能だと事前に念を押されていましたので、一時は参加取りやめを覚悟しましたが、幸い同行してくれていたヤゲロニアン大学日本語学科の学生（もちろんポーランド人。日本語がすこぶる堪能で、この

10月から東北大学の文学部に留学しています）がしつこく訊ねてくれたところ、クレジットカードでキャッシングする形にすれば、（どういう仕組みかはわかりませんが）指定の口座に振り込めるとのことで、何とかこの問題もクリアしました。

発表はポスターですることにしたので（ちなみに題名は「ウミグモ雌性生殖器官系の形態 - 他の鈍角類及び節足動物との比較」）、大学でのhostであるSzczepan M. Bilinski教授（このファーストネームを正確に発音するのはまず不可能です。ポーランド人のスタッフもたいていの場合、独語風に「ステファン」と発音していました）と種々相談しつつ準備を進めていたのですが、ふとスロバキアのビザのことが心配になり大使館に確認したところ、日本人は必ず必要とのことで、これまた大いに焦りました。いわゆる東欧諸国の中でも、ポーランド・チェコ・ハンガリーは3ヶ月以内の観光目的であれば、ビザが不要になったことを知っていたので、ついこの間までチェコと一緒にいたスロバキアも、当然同じだろうと思いこんでいたのです。幸い発給は一時間もあれば可能とのこと、郵送だと出発日ギリギリになるし、トラブルも大いに考えられるので、結局ワルシャワのスロバキア大使館に直接出向き、ビザも無事取得できました。

それやこれやで何とか出発日（7月11日）を迎えました。クラクフからスタラ・レスナへは、まず国境近くのザコパネ（Zakopane）までバスで行き、そこからスロバキアのポブラド（Poprad）行きのバスに乗り換えて行きます（それぞれ約2時間半の予定）。この時も、最初に乗るバスを間違えそうになったり、ザコパネまでの一本道が事故渋滞で乗り換えの時間に危うく遅れそうになったり、国境でのパスポートチェックで私達家族だけがえらく時間がかかっ



たりといろいろあったのですが、それでもようやくポプラドへ到着しました。その頃にはいい加減疲れていたもので、手っ取り早くタクシーで会場兼宿泊所のスタラ・レスナの Hotel Academia へと直行しました。到着後すぐに受付で参加登録をし、各種おまけ（アブストラクト・名札・観光パンフの類）をもらって、ようやく部屋で一休みという段になって、今度は部屋分けのリストに名前が無いとのこと。受付の担当者とホテル側で長々と交渉がありましたが、ホテルを割り振る際に名前を落としてしまったらしいということで決着が付き、明日からの大会に少々不安を残しつつ、アブストラクトにもほとんど目を通すことなく、その日は早々に休みました。

さて、これからいよいよ大会へ突入するのですが、それまでにいろんな事が起きすぎてしまったせいで、誌面が尽きてしまいました。肝心の大会の様子等は、次号に回したいと思えます。

なお、今回の大会の proceedings は、スロバキアの "Entomological Problems" という雑誌の特別号としていずれ発行されるのですが、アブストラクトを見たいといったリクエストがある方は、直接私宛お問い合わせ下さい。連絡先（もちろん日本の）は、最新の会員名簿にある通りです。



日本各地で採集された、稀産種や分布上の重要種などについての情報を掲載する。これを読み、「私もこんな種類を採集しているぞ」という方はその情報を是非お寄せいただきたい。

#### ムツトゲイセキグモ

福井県敦賀市縄間 1999年7月25日 幼体  
1新海 明

福井県美浜町竹波 1999年7月25日 幼体  
1新海栄一

#### カトウツケオグモ

福井県敦賀市名子 1999年7月25日 幼体 1  
初芝伸吾

#### スズミグモ

埼玉県日高市榆木 1999年8月1日 成体 3  
平松毅久・笠原喜久雄

福井県敦賀市中池見湿地 1999年7月25日  
成体 1, 亜成体 1 東京クモ談話会合宿  
参加者一同

#### オオスミコガネグモ

鹿児島県笠沙町野間岳 1999年9月4日 成体  
および幼体多数（あわせて少なくとも 10 個  
体以上）橋本謙太郎

#### ヒシガタヒメグモ

兵庫県姫路市青山 1999年9月19日 成体 1  
榎元智子

#### ヤマトヤギヌマグモ

神奈川県相模原市西大沼 1998年10月17日  
成体 1, 1999年5月14日 成体 1 大川秀  
治

#### ドウシグモ

神奈川県相模原市上大島 1999年5月18日  
成体 1 大川秀治

（新海 明・谷川明男）



おい

## 日本蜘蛛学会公式 ホームページ検討案

(検討期間 1999年8月25日から2000年3月20日まで)

池田博明

日本蜘蛛学会の公式ホームページ作成原案を次に示します。会員・非会員を問わず、骨子案に対するご意見をお寄せ下さい。

ご意見は原則として「日本蜘蛛学会公式ホームページ検討会議」というホームページで内容を公開させていただきます。

できるだけメールをお願いします(メール・アドレスは [fwgd9084@mb.infoweb.ne.jp](mailto:fwgd9084@mb.infoweb.ne.jp) です)。

メールを利用していない方は、ご意見を郵便でお寄せ下さい

258-0018 神奈川県足柄上郡大井町金手 1099

池田博明 宛

### 骨子案

(盛り込む内容の案)

・表紙ページ Japanese version および English version への入り口となる。

学会の紹介および案内

・会員用メニューと非会員用メニューの分岐入口

全員(会員・非会員)に対するサービス

- ・役員名簿
- ・会則および諸規程
- ・入会登録のページ

- ・大会案内
- ・総会報告
- ・講演要旨
- ・資料の利用(会誌の総目次)
- ・関連リンク
- ・自然保護委員会
- ・県別分布リストの利用

会員だけに対するサービス

- ・文献図書の検索および利用申し込み
- ・Acta arachnologica 英文論文の翻訳(抄訳)
- ・クモ関係出版物の割引購入申し込み
- ・バックナンバーなど割引購入申し込み
- ・会費の支払いの自動化(クレジット登録)  
(自然保護協会では既の実施しています)
- ・学会運営に関する意見の表明 = 『掲示板』への書き込み
- ・同定のポイント: 質問に関する専門家の解答のページ
- ・県別分布リストへの追加・投稿



最近気がついた分類関係の文献

最近発表された日本のクモの分類に関連のある論文をいくつか簡単に紹介する。

: Logunov, D. V. & Y. M. Marusik, 1999. New species and new records of the jumping spiders from the Russian Far East (Araneae, Salticidae). *Acta arachnol.*, **48**:23-29



*Pseudicius chikunii* Logunov & Marusik 1999 を新種として記載。このクモは写真日本クモ類大図鑑に *Helicius* sp.A として掲載されている。

：Chida, T. & A. Tanikawa, 1999. A new species of the spider genus *Argyrodes* (Araneae: Theridiidae) from Japan previously misidentified with *A. fissifrons*. *Acta arachnol.*, **48**:31–36.

チリイソウロウグモを新種 *Argyrodes kumadai* Chida & Tanikawa 1999 として記載した。

：A new species of the genus *Leptopholcus* (Araneae: Pholcidae) from the Yaeyama Islands, Japan. *Acta arachnol.*, **48**:37–39.

*Leptopholcus tanikawai* Irie 1999 ヤエヤマコウレイグモを新種として記載した。

：Japanese spiders of the genus *Eriovixia* (Araneae: Araneidae). *Acta arachnol.*, **48**:41–48.

トガリオニグモを *Eriovixia* 属に転属し, *Eriovixia sakiedaorum* Tanikawa 1999 サキエダオニグモを新種として記載した。

：Jäger, P., 1999. *Sinopoda*, a new genus of heteropodidae (Araneae, Sparasidae) from Asia. *J. Arachnol.*, **27**:19–24.

*Sinopoda* を新属として記載し, 日本産のコアシダカグモとヒメアシダカグモを *Sinopoda* に転属した。

：松田まゆみ, 1999. 北海道中央高地から採集された北方系の2種のヤドカリグモ。上士幌町ひがし大雪博物館研究報告, (21): 55–59.

*Thanatus arcticus* Thorell 1872 ホッポウヤドカリグモと *Thanatus bungei* (Kulczyński 1908) タカネヤドカリグモを日本

新記録として記録した。

(谷川明男)



## ギャラリー



アミナゲグモの一種

オーストラリアのケアンズ植物園内で撮影した。入場料を払って入園するほうではなく、いつでも入れるほう。もちろん写真は夜撮影した。



## 原稿募集中

「遊糸」の原稿を募集中です。ちょっとした観察記事(短報), 会員に広く知ってもらいたい情報(総説), 採集記録, 文献紹介, 各地の同好会の催物情報, 研究上の標本や資料募集の記事等等, なんでも構いません。こんなコーナーも作って欲しいという希望があれば, それもOKです。会員の皆様のご協力を是非お願いします。

投稿にあたってのお願い

1. 原稿はクモ形類・多足類に関することならなんでも構いません。
2. 字数制限はありませんが、あまりに長文の場合は削除や分割での掲載をお願いすることもあります。
3. 原稿はワープロ、手書き原稿、はがき、E-mail などなんでも構いません。

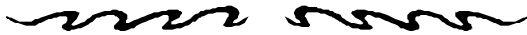
原稿送付先

190-0022 立川市錦町 3-12-16-1103

新海 明まで

E-mail では dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp (谷川明男) まで

発行は、年 2 回 (5 月, 11 月) の予定。締切は発行月の前月末日です。



遊絲 3, 4 号会計報告 (1998.8 ~ 1999.7)

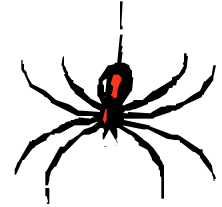
収入	
寄付	77,677 円
学会補助	5,290 円
繰越金	342 円
合計	83,309 円
支出	
遊絲 3 号送料	24,030 円
遊絲 4 号送料	23,580 円
紙/封筒/プリンタートナー	32,000 円
小計	79,610 円
次号繰越金	3,699 円
合計	83,309 円



編集後記

前号に引き続き、会員からたくさんの原稿をお寄せいただき、編集作業も一段とスムーズに進むようになってきました。「遊絲」を、全国に散らばる会員の観察、採集や飼育の記録、などの情報の交差点にできたらと願っています。これからも、たくさんの投稿をお待ちしています。

(新海 明)



## 日本蜘蛛学会

入退会は

事務局

525-8577 草津市野路町東 1-1-1

立命館大学理工学部生物地球科学研究室

吉田 真

Tel 077-561-2660 (Fax 077-561-2661)

会費の問い合わせおよび住所変更は

会計幹事

576-0043 交野市松塚 7-9

金野 晋

Tel (Fax) 0720-91-6701

年会費 正会員 7000 円 (学生は 5000 円)

郵便振替口座 00970-3-46745

---

遊絲 第 5 号

1999 年 11 月 25 日発行

編集者 新海 明, 谷川明男, 池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 西川喜朗

---